

イザヤ書 第66章10～16節

ガラテヤの信徒への手紙 第6章14～18節

ルカによる福音書 第10章1～12、16～20節

7月に入りましたが、6月末から始まった猛暑が続いております。猛暑にもかかわらず、電力の節約が叫ばれております。自然環境保全のために、各団体、各家庭において、電力の消費を抑えることは大切ですが、どうぞ、健康維持を第一に節電をお考え下さい。

本日の旧約日課は、「イザヤ書」、そしてその最後の部分です。南ユダ王国を滅ぼしたバビロニアが、ペルシア帝国に滅ぼされてバビロン捕囚が終了しますが、本日の箇所は、そのバビロン捕囚の終了に関する預言です。

「エルサレムと共に喜び祝い 彼女のゆえに喜び躍れ 彼女を愛するすべての人よ。彼女と共に喜び楽しめ 彼女のために喪に服していたすべての人よ」（イザヤ66:10）では、エルサレムを「彼女」と女性に譬えています。主なる神様とエルサレムという都市とが、夫婦関係であるかのように語られているのです。また次に「母がその子を慰めるように わたしはあなたたちを慰める。エルサレムであなたたちは慰めを受ける」（イザヤ66:13）とありますが、そこでは主なる神様と、その民イスラエルが、母子関係であるかのようにも描かれています。これらの言葉にあるのは、バビロン捕囚からの解放の喜びですが、主なる神様自身が、その民の解放を喜んでいるといえます。

また「主はこう言われる。見よ、わたしは彼女に向けよう 平和を大河のように 国々の栄えを洪水の流れのように。」（イザヤ66:12）とあるように、主なる神様の民の首都、エルサレムから、平和が世界に広がるような希望が語られます。しかし、同時に、「主は必ず火をもって裁きに臨まれ 剣をもってすべて肉なる者を裁かれる。主に刺し貫かれる者は多い。」（イザヤ66:16）と少し恐ろしい言葉も語られています。これは、バビロン捕囚からの解放が、ペルシア帝国によってなされたことと関連しているといえます。

預言者イザヤは、ペルシア帝国の王キュロスをメシア・救世主のように扱います。それは、メシア・救世主が異邦人も任命されるということです。そして、バビロン捕囚からの解放という歴史的出来事が、単に主なる神様によるイスラエルの民への特別扱いではないことを示しています。主なる神様は、イスラエルをご自分民として選ぶのですが、民族的枠組みを超えて歴史にかかわるのです。そして、イスラエルとは、主なる神様が、正義と平和をこの

世界に示すための、具体例として用いる存在にほかなりません。イスラエルが選ばれた理由は、ここにあります。

使徒書は、「ガラテヤの信徒への手紙」です。この部分も、この手紙の最後の部分です。パウロは、「しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」

(ガラテヤ 6:14) と最初に語っています。十字架以外誇らないというのは、「コリントの信徒への手紙一・二」にも見られる、パウロの一貫した主張といえます。パウロは、パウロがそのように述べるのは、主なる神様の愛が、もっとも分かりやすく示されるのが、人間としては敗北の象徴、弱さの象徴である、イエス・キリストの十字架に他ならないと理解したからです。

パウロは、ほかの弟子たちのように、地上で活動されるイエス様に出会っていません。しかし、復活されたイエス様に出会い（それまでは教会を迫害していましたが）、イエス様の十字架の出来事に大きな主なる神様の意図を見出しました。それは一言でいえば、主なる神様の愛ということですが、信じるキリスト者各個人に関することであると同時に、天地創造から続いている、すべての被造物に対する主なる神様の愛の表れにほかならないことを見出しました。その主なる神様の愛は、先にふれた「イザヤ書」にも示されていた、ご自分の民であるイスラエルに対する愛と同じです。それゆえに、主なる神様は無条件で人々を愛されるのではありますが、その愛には、信仰者がイスラエルと同じように、この世界に主なる神様の正義と平和を示す人々となってほしいという願いがあります。だからこそ、「この十字架によって、世はわたしに対して、わたしは世に対してはりつけにされているのです」(ガラテヤ 6:14) と非常にスケールの大きな発言へと続くのです。また、パウロ自身、イエス・キリストの十字架を通して、主なる神様の愛を信じたとき、すべてが変わったのです。だからこそ、「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」(6:15) という言葉が続きます。割礼の有無とは、イスラエルの民か異邦人かということです。自分の民が、自分の愛にこたえて、世界に正義と平和を示すことを求めている神様は、さらにすべての人が、イエス・キリストの十字架を通して、それを示すことを求めているのです。だからこそ、もはや問題となるのは、イスラエルか否かではなく、それを超えて新しくされることです。「新しく創造されることです」とある部分は、直訳すれば、「新しい創造」です。イエス・キリストを信じる人々は、もう一度「天地創造」が起こるかのように、新しくなるのです。だからこそ、パウロは、「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。」(6:16) と続けています。パウロにとって、古いイスラエルも大切です。しかし、それ以上に、イエス様を信じる人々によって構成される、新しいイスラエルがより鮮

明に主なる神様の愛し示すのであり、そうである限り、彼らの主なる神様の平和と憐みがあるようにと願っているのです。

福音書は、「ルカによる福音書」における弟子の派遣の記事です。牧師の按手式などで用いられることも多い個所です。この中でこの福音書は、十二使徒以外に七十二人を任命したと記しています。この派遣の命令の中で、イエス様は、「**収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい**」（ルカ 10:2）と語ります。ここにあるのは、この世界が終りに近づいているという危機感の中で、今こそ、イエス様の福音を宣べ伝えなければならないと述べています。そしてそうであるからこそ、どんなに宣べ伝える人が多くても足りないと主張しています。

この主張にある危機感、宣べ伝える人の数だけに関係しているわけではありません。「**財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。～家から家へと渡り歩くな**」（ルカ 10:4～7）と言葉を続けます。ほとんど何も持たずに宣教に出かけ、また家を渡り歩かずに与えられたものを受けなさいと語っているのです。人間的な思いを徹底した排除するためです。

さらに、「**神の国はあなたがたに近づいた**」（ルカ 10:9）と述べ、もしその宣教を町や村の人びとが受け入れなかった場合は、徹底して決別するようにとも述べています。この部分は、非常にキリスト者と非キリスト者を分けるような印象を受ける部分です。

このような宣教に関するイエス様の命令を、弟子たちは実行します。そして七十二人は喜んで帰ってきてイエス様に自分たちの行ったことを色々と報告します。しかし、イエス様が語るのは、人々が宣教を受け入れたことや、悪霊が追放されたというような、この世界で何が起きたかではなく、「**あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい**」（ルカ 10:20）と七十二人も忠告します。人間的な視点で素晴らしいことをしたと喜ぶのではなく、何のためにそれを行ったかを忘れてはならないということです。

さて、この物語は何を示しているのでしょうか。七十二人に対しては厳しい条件で宣教をすることを求め、その宣教を受ける町や村の人びとに対しても、受け入れるかどうかを問う厳しい言葉が向けられています。二者択一的な選択を求めています。しかし、この物語は、キリスト教を受け入れれば救い、受け入れなければ滅びという物語として受け入れられ、また普遍化されてしまっただけではないと思います。またそのことが、著者の意図であるとは思えません。

著者が福音書を書いた時代、地中海世界は、ローマ帝国が勢力を拡大し、ローマの平和が確立していく時でした。その中でできたばかりの教会は迫害され始めます。ローマの語る平和と、ここでイエス様が語る平和は大きく異

なるからです。世界が豊かさと平和を享受し始めようとしたとき、教会は宣教し、まったく世界とは違う平和を語り始めるのです。そのような中で、二者択一的な宣教になるのは当然といえます。そして、そうであるがゆえに、その宣教の実行は勇気がいります。しかし、どんなに困難であっても、大切なことは、それを人間的な勇気や努力で達成するのではないということです。それらを超えて、宣教を行うことが大切です。なぜならば、その宣教の基は、イエス様の十字架と復活であり、その十字架と復活の基は、天地創造の初めからある主なる神様の愛、すべての被造物を愛そうとされる愛に他ならないからです。それゆえに、二尺択一を求めています、主なる神様が願っているのは、その愛を受け入れることのほうです。

現在、行われている戦いについて、教会という視点から見ますと、わたしたちの聖公会よりも伝統的に古い、元祖教会ともいえる教会がかかわっている国々の戦いです。それは、それだけ主なる神様がその戦いについて、嘆かれていることを示していると思います。戦っている両国とも、主なる神様にとって大切な人々であるからです。

歴史から学ぶことが大切だとよく言われますが、歴史は人間が創作し、ことに勝者が創作した歴史が残ります。今行われている戦いも、その歴史的評価を下すのは、勝者のほうでしょう。しかし、主なる神様の視点は異なります。預言者イザヤは、バビロン捕囚という主なる神様の王国の徹底的な滅びと、そこから異邦人の王による解放という、出来事を通して、人間の思いを超えて、主なる神様を信じ、正義と平和を示すことの重要性を明らかにしました。

パウロも、今までの歴史に関する学びでは、間違いと思っていたイエス様の十字架という一点に、まったく違う主なる神様の視点を見出しました。ルカの物語のイエス様の言葉は、厳しい二者択一的な宣教を語ると同時に、その背後に、天地創造の時から今も、そしてこれからも主なる神様の愛があることを示しています。

わたしたちの教会は、東京教区の中でも長い歴を持ちます。かつてわたしたちの国が、世界を相手に戦いを行ってしまった時も存在し、またそれ以前からも存在していました。歴史的評価からすれば、悪の戦いをしてしまった時代からあった教会です。それは、わたしたちの教会がそれだけ主の愛を示す使命が重いということです。その使命とは、主の愛を感じられる礼拝を示すこと、愛に満ちた交わりを示すことです。世界全体があらたな戦いに向かいそうになっている今、その使命を真摯に受け止めて実行していきたいと思えます。